



Title	明治醫學の一隅
Author(s)	古武, 彌四郎
Citation	懷徳. 1954, 25, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90272
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治醫學の一隅

古武彌四郎

私は今明治醫學の一隅と題してお話するわけですが、それほど醫學に通じて居る私でもなし、唯年七十幾歳の今日までそれこそ醫學の一隅に暮し來つた經歷から、明治殊にその晩年の勝れた醫學者中に、私の實際けいがい
に接した方々が多數あり、その印象を基礎として話せば、殊に明治時代のお方には多少の思出にもなろうかと考え、
本學の木村教授から頼まれるまゝに、敢て演壇に上つた次第であります。

明治醫學と言へば無論江戸醫學に次で來つた、醫學としては殊に西洋醫學を輸入した爲の空前の進歩を遂げた時代
であります。そのこゝに至つた前提として、殊に醫學を大阪に於て學んだ私としては、それなしでは明治醫學をも説
くことも出来ないと思ひますものに、長崎の精得館があり、大阪の適塾があります。適塾は岡山出身の緒方洪庵先生
の私塾で、先生が若くして大阪に出られ、經營せられたものであることは申すまでもありません。今備中の足守には
洪庵先生記念の石碑が建てられて居り、墓表は荒木先生が記されて居ります。

皆さん御承知の通り洪庵先生の門下には幾多の俊才が輩出し、たゞに醫學という狭い範圍ではなく、明治文化に多
大の影響を與えた偉人を出したことは茲に述べるまでもないことであります。先生が大阪を切上げていよいよ江戸に
出られたのは文久二年で西洋醫學所の頭取として赴任せられたのであります。同三年六月に既に御他界になつたのは
眞に惜みてもあまりあることであります。併しこの西洋醫學所、後單に醫學所と呼んだものは後の東京醫科大學のら
んしようとなつたもので、緒方洪庵先生はこの意味に於て、また日本或は東京の醫學教育に對して先達であられます。

江戸醫學から明治醫學の初頭に於て西洋醫學は先ず幾多の翻譯書として世に紹介せられました。醫人として始めて外國人が日本に渡來したのは英醫ウィリス Willis 氏で、殊に軍陣醫學に寄與せられた功績は偉大なものでありました。大阪では明治元年ボードイン Baudin 氏を長崎より招き、次でエルメンス Emerins 氏を和蘭より聘して大阪醫學校（大阪病院）なるものが出發したのであります。東京で東京大學醫學部の現われたのは明治十年で當時の教授は獨逸より聘せられ、明治十二年には早くも卒業生が出され、醫學本科卒業生十八名、製藥學卒業生十九名に學位記が授與せられて居ます。明治十九年東京醫科大學は帝國大學醫科大學となり、教授三宅秀氏は醫科大學長を兼ねられ、明治三十五年以降は西洋の教授が盡く邦人に代えられるに至つた。

獨逸よりの教授中殊に世に知れ亘つて居ますものはベルツ Baels 教授で、教授がわが明治醫學に貢獻せられて居る功績は頗る大きい。明治十年始めて來朝せられ、はじめは生理學、婦人科學までも擔當せられて居たそうですが、後には内科專任教授となられた。明治十二年ベルツ教授の後任は實に入澤達吉先生で、わが阪大總長であつた楠本長三郎先生は其の弟子である。楠本先生から私共度々内科のベルツ、外科のスクリバ Scriba 兩先生の話を承わつて居り、楠本先生の縁で入澤先生とも一、二度同座するの榮を得た。楠本先生乃至私共の學生時代に東京の醫科大學に教鞭を執られて居た方々には明治醫學の大家が澤山居られた。殊に私共は内科の青山胤通、入澤達吉、三浦謹之助、眼科の河本重次治、外科の佐藤三吉、近藤次繁、皮膚病の土肥慶藏、解剖の田口和美、大澤岳太郎、小金井良精、病理學の三浦守治、山極勝三郎、醫化學の隈川宗雄、須藤憲三、などの諸先生、京都の醫科大學では、醫化學の荒木寅三郎、外科の伊藤隼三、小兒科の平井毓太郎、解剖の足立文太郎、藥理の森島庫太、病理の藤浪鑑諸先生など始終お名前を聞ききたお世話にもなりました。

日本人に依つて大學の教職が繼がれるようになって日本醫學の業績が漸く世に知れ亘るようになってたが、何と言つ

ても明治初年に於ては日本人が全然日本人だけではまだその域に達せず、當時の業績は多く外人と共同、若くは外國の教室で發表せられたものである。私は之からこの道に偉業を残された世にも勝れた研究家を多少の感想を交えて簡単に語つてみようと思う。無論多くは私の管見から出たもので、人選も繁簡もよろしきを得たものではありませぬ。

先ず北里柴三郎先生から申述べます。北里先生は熊本縣の生れで、少年の頃熊本醫學校で蘭人マンズフェルド *Mansfeld*、わが緒方正規先生などに教えられたそうである。後年細菌學を研究せられるに至つたのは其の出發點を緒方先生に受けたものと思われる。北里先生は私の恩師荒木寅三郎先生とはじつこの間柄で、私もそのために北里先生に多少の親みを覺えたものであります。かつてわが荒木先生は岡山で講演せられ談偶々北里先生に及び、申されたのは北里先生の人と爲りには世に傳えらるゝように、多少の缺點ありとするも、先生がその恩師エールリヒ *Ehrlich* に仕えらるゝ態度を見ると、先生がいかに立派な人物であるかを知ることが出來ると。申すまでもなく、北里先生はエールリヒの非常な信頼を得られ、かの有名な破傷風菌の業績を成就せられ、進んでベーリング *Behring* と共に血清療法を創始せられるに至つたのであります。血清療法的確に應用せられたのは實布利の療法で、それがベーリングの研究問題であつたために血清療法といえは北里という方よりもベーリングという方が有名になつて居るが、その出發點から見ると北里なる名はベーリングなる名以上であるべき筈であります。先頃ベーリングはエールリヒと共に盛んなる生誕百年祭を獨乙に於て、亦わが日本に於て施行せられて居ますが、私共は兩先生を追慕すると共に特にわが北里先生に敬意を捧ぐるものであります。

北里柴三郎先生あつて秦佐八郎氏あり。志賀潔氏あり、野口英世氏ありと申してよろしく、兩先生共に北里一門より出で、世界的大業績を成就せられたのは偉とするに足りります。思い起す。私は 1909 年私が大阪から派遣せられて獨乙ケーニヒスベルグ *Königsberg* に留學中 1910 年第八十一回(?)自然科學會が此地に催されたので私も參加しました。本會に於てエールリヒ先生は化學療法に就て講演せられたが、屢々熱中容易に語句も出なくなり、傍よりの

注意を受けて漸く演了せられた程でありました。講演中先生が度々繰返された“mit Hata behandelt”なる語句が滿堂聴者のよく了解する所とならざりしを遺憾に思ひ、後で私は一寸秦氏の經歷を附加して置きました。申すまでもなく先生が Hata と申されしは、606 號の事であり、秦氏の功績を顯揚せられる爲の代名詞であつた。私は西洋に居て後にも先にも此追加ほど聴衆から感謝されたことは曾てなく、今も四十餘年の昔を追懷し、感無量のものである。

次に山極勝三郎先生を申し上げます。元來日本の病理學なる文字はいつ頃から始まつたのかよく存じませぬが、大阪の緒方洪庵先生が病學通論を著わされたのが斯學輸入の元祖となつたと思つて居るのであります。それまでに病原學という語はあつたが緒方先生が病學と改められ、今日の病理學の基礎がなつたのであります。東京の病理學教室なるものは明治二十年頃三浦守治先生が始められたもので、二十八年には山極勝三郎先生が教授となられて居る。

皆さん御存知のように、三浦守治先生はわが大坂の病理學を創設せられた佐多愛彦先生の恩師であります。病理學に於て腫瘍學は最も興味ある一節でありますが、ウィルヒョウ Virchow が癌の發生に於てその成立を刺戟 Reiz に依つて説明して居り、山極先生はこの假説を裏付ける意義に於て市川厚一氏と共に家兔の耳殻にタールの塗布を續け、遂に實驗癌の生成に成功して、未知の世界に一大光明をもたらしたものである。それまでにパピローム位は實驗的にこしらえたものもあつたとも聞きますが、癌を藥品で造り出したのはわが山極先生が始めてであつた。人口に膾炙して居る先生の句にも現われて居るように先生の得意や思うべしであります。故あるかな其の後佐々木隆興（木下良順）吉田富三諸氏の如き實驗癌の大研究者が我が國に輩出したことは。山極先生は之位にして次で鈴木梅太郎先生を語ることにします。

醫學は素より疾病の治療をあてたものでありますが、治療には藥治も入要、手術も入要、更に病の根本にさかのぼつて豫防が入要である。何れにも榮養は基礎である。此基礎なしでは治療も豫防も問題にならぬ。榮養の知識は養素

の選擇から始まる。明治初年頃までは養素といへば蛋白質、含水炭素、脂肪及類脂肪及び一定の礦質でこの所謂四大要素で足るものと信ぜられ、この外になほ一定の微量有効物質が頗る重要であることは全然注目せられて居なかつた。之からお話申す鈴木梅太郎先生の業績はこの新たな領域を開かれたもので、元來日本に廣がつて居る脚氣の研究に困んだものであります。鈴木先生は農科出身で、研究も亦農科の教室に於て行われたものである。脚氣の研究はエイクマン Eijkman の鶏に就てなされた白米病に於て起り、鶏に白米を與えたと、脚氣に似た多發性神經炎が起ることが注目せられたのに始まる。甲論乙駁の後米糖に特殊の副養素が含有せられて居ることが鈴木先生に依つて發見せられ、之がオリザニンと呼ばれ、フランク Funk に依てビタミンと名づけられたものである。此物質が食物中に缺けると脚氣が起ることが漸次世からも信ぜられるようになり、今日ではかかるビタミンが米糖から或は酵母から純粹に分離せられたばかりでなく、亦合成せられるまでになつたのは學術の進歩も驚くべきものである。私共學生の頃都築某氏が脚氣に米糖が利くと始めて發表した當時などは殊に病理學者から笑われて居た程のものである。何んぞ知らむ近代の榮養學はかかる業績を契機として、殊に微量有効物質に重きを置くに至らんとは。ビタミンの研究は日本に於けるその後の發展に多少遺憾な所があつて、兎角北米及び西洋に押され氣味に過ぎたが、その出發に力を盡した鈴木梅太郎先生の功績は今も光つて居る。

鈴木先生のもと同じく所謂醫科學ともいへべき領域に於て大業績を完成せられたものには、高峰讓吉先生と長井長義とがある。

高峰先生は越後高田から高岡に移られた祖先を有せられる者で、わが大阪には縁の深い方である。曾ては大阪醫學校の生徒であられたという。私共が大阪府立醫學校で習學の當時、當時校長の佐多愛彦先生から招かれて高峰先生は醫學校の會堂で講演せられたこともあつた。その時先生がまだ醫學校の生徒であられた當時の感想をしみ／＼話されたことも今猶昨の如しである。赭顔の溫容が眼前に見えるように思われるが、數えて見ればはや五十餘年の昔であ

る。高峰先生がアドレナリンを副腎より結晶分離せられたのは今日所謂ホルモン (Hormon) と稱えられる物質中最初のもので、その助手上中啓三氏と共に成就せられたものである。高峰先生はたゞに學者で事業家で在られたばかりでなく、謂わば無冠の日本大使で裏面に於て政治上に盡された功績は大したものであつたと思われまゝ。去年は高峰先生生誕百年祭に當るので金澤で記念講演會も開かれたと聞く。亦盛んなりというべしであります。高峰製品を中心とする三共社も今日に榮えて居り、アドレナリンやタカヂアスターゼは今も醫藥として缺くべからざるものである。私は一年ばかり北米に居り度々彼のリバーサイドに立つ舊高峰先生の高層邸を仰いで居たが今日もなほ其の邊の景色が時々ほうふつする。

次に長井長義先生に就て話し度い。長井先生は徳島藩の人で二、三度お目にかかつたがなつかしい方であつた。度々洋行せられたが、その最初は既に明治四年に於て亞米利加を経て獨乙に行かれたという。アー、ヴェー、ホフマン (A. W. Hofmann) に師事せられ、十二年振りとやらで歸朝其の後日本藥學界に盡された功績は偉大であります。次で斯界には現存朝比奈泰彦氏の如き勝れた學者が出て漸次發達したが、長井先生が發見せられたエフェドリンの如きは今も世に殊に喘息の治療に用いられて居る。先生は齡八十三歳に達し昭和二年第四回目の洋行で、日本に於て永眠せられたテレゼ夫人の故國獨乙を訪ねられ、その際獨乙藥學會は先生を名譽會員に推薦して居ります。

明治醫學或は明治醫學者というのが適當なかも知れぬがたとえ一隅にしても不完全極まつたお話になりまして、故人に對しても甚だ禮を失したと思ひますが、總て御許を願ひ最後に、明治陛下の御不例に際し、御治療申上げて居た青山胤通先生と三浦謹之助先生とに無限の敬意を表して此講演を終り度いと存じます。

追記

山極先生のコールタールに因る實驗痛成功は大正四年の事なので、或は明治醫學に入れるべきものでないかも知れませぬが、先生の東大教授御就任 (明治二十八年) などから、癌の御實驗も明治醫學中のものとしてお話しただけであります。